

# 経塚資料コレクション



優婆塞が行ふ道をしるべにて来む世も深き契りたがふな  
 光源氏が夕顔に、五六億七〇〇万年後の弥勒出世までも変わらぬ愛を誓った歌は、その日のうちに物怪に取り殺された夕顔を寶卷きにして鳥辺野の葬地へ送ってしまふ光源氏を知ると、空々しい。しかし弥勒菩薩が兜率天での修行を終え、如来となつてこの世を救済しに戻ってくるという未来を、平安の都人たちが日常的に意識していたのは事実であろう。

積迦の滅後、二〇〇〇年がたつと仏法は滅び暗黒の世が訪れるという仏教的世紀末思想である。末法思想が、平安時代の中ごろから流行した。その二〇〇〇年後というのが、日本では永承七年（一〇五二）と考えられており、リアリティをもっていたのである。末法思想の流行は浄土教を広めることとなる。すなわち、末法の現世に期待するのではなく、生まれ変わる来世に希望を託すのである。積迦の後継である弥勒如来

がこの世に弥勒浄土を現出することを期待する弥勒信仰、観音菩薩がいる補陀落浄土を志す観音信仰、阿弥陀如来がいる極楽浄土に生まれ変わることを願う阿弥陀信仰、これらはいずれも浄土教である。

しかし、この世に背を向けるだけで何もせずに過ごしては、願いは叶わない。仏教は因果応報を説いており、来世で浄土に生まれるためには、現世で功德を積み重ねなければならない。ここに浄土教の積極性がある。日常的な善業ももちろん必要だが、仏教的作善業はさらにその功德が大きく、富裕層は盛んに造寺造仏をおこなった。仏の教えである経典を書写することも、大きな善業となる。法華経では写経の功德がたびたび強調されている。末法の世を克服し、弥勒の出現まで仏法を伝えることは、何にも勝る作善業である。こうして考え出されたのが、法華経を主とする経巻を写し、それを埋納して後世まで伝える、経塚の造営であった。

現在知られている最古の経塚は、寛弘四年（一〇〇七）に藤原道長が願主となった大和金峯山の経塚である。そのため、経塚は貴族層の文化と思われがちである。しかし平安時代の終わりから鎌倉時代にかけて造られた、日本各地で見つかる経塚は非常にバラエティーに富んでおり、地域に根付いた信仰であったことがわかる。経塚造営は地域を挙げておこなった宗教行為であり、それに関わることで庶民層も作善の一端を担い、浄土を期したのである。

国立歴史民俗博物館は日本各地で出土した経塚資料コレクションを所蔵している。経巻を納めた青銅製経筒や、それを保護した陶製外容器、鏡や中国産白磁など、経塚にはさまざまなものが埋納された。塔は本来は仏の骨を納めた墓所であるから、塔の形をした経筒は、仏の教えを記した経典を仏そのものとみなしたことを示している。埋納した人びとには気の毒だが、経巻は地中で腐りほとんど残っていない。しかし千年の時を経て地上に出現したこれらの資料は、当時の人びとの篤い信仰を雄弁に物語ってくれているのである。（国立歴史民俗博物館 研究部准教授 村木二郎）